２０２４年度

第１回アドバンスト入試

時間５０分　１００点満点

国　　語

受験上の注意

１．試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
２．実施時間は５０分で、１００点満点です。時間配分に注意して解答してください。
３．解答は解答用紙にていねいに記入してください。
４．解答用紙・問題用紙両方に、受験番号、座席番号、名前を記入してください。座席番号は、机に貼ってある番号のことです。
５．試験中は携帯電話の電源を必ず切ってください。
６．私語や物の貸し借りなどは認めていません。困ったことがある場合は、手をあげて先生に相談しその指示に従ってください。

受験番号 ＿＿＿＿＿＿＿＿　　座席番号 ＿＿＿＿＿＿＿＿

名　　前 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

聖学院中学校

問題は次のページからはじまります

第一問　次の各問いに答えなさい。

問１　――部のカタカナを漢字に直しなさい。

１　日本では謙虚（けんきょ）であることがビトクとされる。

２　夢を実現するために、あえてイバラの道を選ぶ。

３　神や仏をトウトぶ。

４　初戦に勝利しただけでウチョウテンになってはいけない。

問２　次の格言の空欄に入る語としてふさわしいものを前後の文脈をふまえて考え、記号で答えなさい。

①　「何事であれ、最終的には自分で考える覚悟（かくご）がないと、（　　）の山に埋（う）もれるだけである」羽生善治（はぶよしはる）（将棋棋士（しょうぎきし））

②　「多数の友を持つ者は、ひとりの（　　）も持たない」アリストテレス（哲学者（てつがく））

③　「論理はＡ地点からＢ地点まであなたを連れて行ってくれる。（　　）は、あなたをどこへでも連れて行ってくれる」アルベルト・アインシュタイン（物理学者）

ア　情報　　イ　想像力　　ウ　友　　エ　客

第二問　次の文章は、宮沢賢治「銀河鉄道の夜」の一節です。主人公のジョバンニは、ある日の夜、ケンタウル祭の見物に出かけます。その途中で、つかれて草原に寝ころんだまま、ぼんやりと星空を眺めています。すると、どこからか天の川を走る銀河鉄道の汽笛が聞こえてきて、気づけばジョバンニは、いつのまにかその列車の中にいるのでした。列車には、ジョバンニの友人のカムパネルラをはじめ、さまざまな人が乗ってきます。これを読んで、後の各問いに答えなさい。

【場面Ⅰ】

「もうじきサウザンクロスです。おりる支度をして下さい。」青年がみんなに云いました。

「僕（注1）も少し汽車へ乗ってるんだよ。」男の子が云いました。カムパネルラのとなりの女の子はそわそわ立って支度をはじめましたけれどもやっぱりジョバンニたちとわかれたくないようなようすでした。

「ここでおりなけぁいけないのです。」青年はきちっと口を結んで男の子を見おろしながら云いました。

「厭だい。僕もう少し汽車へ乗ってから行くんだい。」

ジョバンニがこらえ兼ねて云いました。

「[1]僕たちと一緒に乗って行こう。僕たちどこまでだって行ける切符持ってるんだ。」

「だけどあたしたちもうここで降りなけぁいけないのよ。ここ天上へ行くとこなんだから。」女の子がさびしそうに云いました。

「天上へなんか行かなくたっていいじゃないか。ぼくたちここで天上よりももっといいとこをこさえなけぁいけないって僕の先生が云ったよ。」

「だっておっ母さんも行ってらっしゃるしそれに神さまが仰るんだわ。」
「そんな神さまうその神さまだい。」
「あなたの神さまうその神さまよ。」
「そうじゃないよ。」
「あなたの神さまってどんな神さまですか。」青年は笑いながら云いました。
「ぼくほんとうはよく知りません、けれどもそんなんでなしにほんとうのたった一人の神さまです。」
「ほんとうの神さまはもちろんたった一人です。」
「ああ、そんなんでなしにたったひとりのほんとうのほんとうの神さまです。」
「だからそうじゃありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんとうの神さまの前にわたくしたちとお会いになることを祈ります。」青年はつつましく両手を組みました。女の子もちょうどその通りにしました。みんなほんとうに別れが惜しそうで[2]その顔いろも少し青ざめて見えました。ジョバンニはあぶなく声をあげて泣き出そうとしました。
「さあもう支度はいいんですか。じきサウザンクロスですから。」
ああそのときでした。見えない天の川のずうっと川下に青や橙やもうあらゆる光でちりばめられた十字架がまるで一本の木という風に川の中から立ってかがやきその上には青じろい雲がまるい環になって(注2)後光のようにかかっているのでした。汽車の中がまるでざわざわしました。みんなあの北の十字のときのようにまっすぐに立ってお祈りをはじめました。あっちにもこっちにも子供が瓜に飛びついたときのようなよろこびの声や何とも云いようない深いつつましいためいきの音ばかりきこえました。そしてだんだん十字架は窓の正面になりあの苹果の肉のような青じろい環の雲もゆるやかにゆるやかに繞ってい

るのが見えました。

「(注3)ハルレヤハルレヤ。」明るくたのしくみんなの声はひびきみんなはそのそらの遠くからつめたいそらの遠くからすきとおった何とも云えずさわやかなラッパの声をききました。そしてたくさんのシグナルや電燈の灯のなかを汽車はだんだんゆるやかになりとうとう十字架のちょうどま向いに行ってすっかりとまりました。

「さあ、下りるんですよ。」青年は男の子の手をひきだんだん向うの出口の方へ歩き出しました。

「じゃさよなら。」女の子がふりかえって二人に云いました。

「さよなら。」ジョバンニはまるで泣き出したいのをこらえて怒ったように(注4)ぶっきり棒に云いました。女の子はいかにもつらそうに眼を大きくしても一度こっちをふりかえってそれからあとはもうだまって出て行ってしまいました。汽車の中はもう半分以上も空いてしまい俄にがらんとしてさびしくなり風がいっぱいに吹き込みました。

そして見ているとみんなはつつましく列を組んであの十字架の前の天の川のなぎさにひざまずいていました。そしてその見えない天の川の水をわたってひとりの神々しい白いきものの人が手をのばしてこっちへ来るのを二人は見ました。けれどもそのときはもう硝子の呼子は鳴らされ汽車はうごき出しと思ううちに銀いろの霧が川下の方からすうっと流れて来てもうそっちは何も見えなくなりました。ただたくさんのくるみの木が葉を［①］光らしてその霧の中に立ち黄金の円光をもった電気栗鼠が可愛いい顔をその中からちらちらのぞいているだけでした。

【場面Ⅱ】

そのとき［②］霧がはれかかりました。どこかへ行く街道らしく小さな電燈の一列についた通りがありました。それはしば

らく線路に沿って進んでいました。そして二人がそのあかしの前を通って行くときはその小さな豆いろの火はちょうど挨拶でもするようにぽかっと消え二人が過ぎて行くときまた点くのでした。

ふりかえって見るとさっきの十字架は［③］小さくなってしまいほんとうにもうそのまま胸にも吊るされそうになり、さっきの女の子や青年たちがその前の白い渚にまだひざまずいているのかそれともどこか方角もわからないその天上へ行ったのかぼんやりして見分けられませんでした。

ジョバンニはああと深く息しました。

「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一緒に行こう。僕はもう（注5）あのさそりのようにほんとうにみんなの幸のためならば僕のからだなんか百ぺん灼いてもかまわない。」

「うん。僕だってそうだ。」[3]カムパネルラの眼にはきれいな涙がうかんでいました。

「けれどもほんとうのさいわいは一体何だろう。」ジョバンニが云いました。

「僕わからない。」カムパネルラがぼんやり云いました。

「僕たちしっかりやろうねえ。」ジョバンニが胸いっぱい新らしい力が湧くようにふうと息をしながら云いました。

「あ、あすこ（注6）石炭袋だよ。そらの孔だよ。」カムパネルラが少しそっちを避けるようにしながら天の川のひととこを指さしました。ジョバンニはそっちを見てまるでぎくっとしてしまいました。天の川の一とこに大きなまっくらな孔がどほんとあいているのです。その底がどれほど深いかその奥に何があるかいくら眼をこすってのぞいてもなんにも見えずただ眼がしんしんと痛むのでした。ジョバンニが云いました。

「僕もうあんな大きな暗の中だってこわくない。きっとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも

僕たち一緒に進んで行こう。」

「ああきっと行くよ。ああ、あすこの野原はなんてきれいだろう。みんな集ってるねえ。あすこがほんとうの天上なんだ。あっあすこにいるのぼくのお母さんだよ。」カムパネルラは俄に窓の遠くに見えるきれいな野原を指して叫びました。

[4]ジョバンニもそっちを見ましたけれどもそこはぼんやり白くけむっているばかりどうしてもカムパネルラが云ったように思われませんでした。何とも云えずさびしい気がしてぼんやりそっちを見ていましたら向うの河岸に二本の電信ばしらが丁度両方から腕を組んだように赤い腕木をつらねて立っていました。

「カムパネルラ、僕たち一緒に行こうねえ。」ジョバンニが斯う云いながらふりかえって見ましたらそのいままでカムパネルラの座っていた席にもうカムパネルラの形は見えずただ黒い（注7）びろうどばかりひかっていました。ジョバンニはまるで鉄砲丸のように立ちあがりました。そして誰にも聞えないように窓の外へからだを乗り出して力いっぱいはげしく胸をうって叫びそれからもう咽喉いっぱい泣きだしました。もうそこらが一ぺんにまっくらになったように思いました。

【場面Ⅲ】

ジョバンニは眼をひらきました。もとの丘の草の中につかれてねむっていたのでした。[5]胸は何だかおかしく熱り頬にはつめたい涙がながれていました。

ジョバンニはばねのようにはね起きました。町はすっかりさっきの通りに下でたくさんの灯を綴ってはいましたがその光はなんだかさっきよりは熱したという風でした。そしてたったいま夢であるいた天の川もやっぱりさっきの通りに白くぼんやりかかりまっ黒な南の地平線の上では（注8）殊にけむったようになってその右には蠍座の赤い星がうつくしくきらめき、そらぜ

んたいの位置はそんなに変ってもいないようでした。

（宮沢賢治「銀河鉄道の夜」より）

（注）

1　も少し：もう少し。

2　後光：聖なる人物やものから発せられる光、または光のようなもの。

3　ハルレヤ：ユダヤ教やキリスト教において、神を賛美し、喜びを表す言葉である「ハレルヤ」と同じと考えられる言葉。

4　ぶっきり棒に：ぶっきらぼうに。

5　あのさそりのように：本文より前の場面に、さそりが主人公の話が出てくる。

6　石炭袋：コールサックと呼ばれる光を放たない暗黒星雲。実際の空では、天の川に黒く穴が開いているように見える。

7　びろうど：この場面では、列車の座席に貼られている、独特の手ざわりの布のことを指す。

8　殊に：とくに。

問1　――――1について、次の各問いに答えなさい。

Ⅰ　この場面はどのような状況だと読み取れますか。次の中から最も適切なものを選びなさい。

ア　ジョバンニとカムパネルラが乗っている銀河鉄道に、青年と男の子、女の子の三人の人物が現れた。列車は三人が目指している「サウザンクロス」に近づいており、人物たちは別れを惜(お)しんでいる。

イ　ジョバンニとカムパネルラが乗っている銀河鉄道に、青年と男の子が現れた。二人の目的地の「サウザンクロス」で降りるのをいやがる男の子を、カムパネルラの隣(となり)に座っていた女の子がなぐさめている。

ウ　銀河鉄道にはジョバンニ、カムパネルラ、女の子が乗っている。そこに青年と男の子が現れた。目的地に近づいて、降りたくないという男の子を、ジョバンニがなぐさめている。

エ　銀河鉄道にはジョバンニとカムパネルラが乗っている。そこに青年と男の子、女の子が現れた。男の子が目的地で降りたくないと言う一方で、ジョバンニは女の子との別れを惜しんでいる。

Ⅱ　――――1の言葉を、ジョバンニは「こらえ兼ねて」言ったと本文では書かれています。この時のジョバンニの心情として最も適切なものを選びなさい。

ア　ここで降りたくないという男の子の気持ちに同情し、一緒に乗っていけるよう青年に提案したい気持ち。
イ　ここで降りたくないという男の子の気持ちに共感はするが、一緒には行けないのだとなだめたい気持ち。
ウ　皆とここで別れなければいけないのはわかっているが、男の子の言葉にいたたまれなくなった気持ち。
エ　皆とここで別れなければいけないのをわかっていて、男の子にもそのことを理解してほしい気持ち。

問2　①～③に入ることばをそれぞれ【語群】のなかから選んで書きなさい。同じ言葉を二度使ってはいけません。

【語群】　すっかり　ひっそり　さんさんと　そろそろと　すうっと

問3　――――2で人物たちの「顔いろ」が「少し青ざめて」いるのはなぜだと考えられますか。最も適切なものを選びなさい。

ア　まったく知らないところへ行くのが不安でこわいから。
イ　天上がいいところかどうか、本当にはわからないから。
ウ　「神さま」のところへは行けるが、別れはつらいから。
エ　天上へ行かなければならないという運命がつらいから。

問４　「銀河鉄道の夜」で列車がめぐる旅路は、実際の星座をもとに想像されています。【場面Ⅰ】に描(えが)かれている「サウザンクロス」の物語のもとになった星座は「南十字星」とも呼ばれ、四つの明るい星が十字の形をつくるように南の空に並んでいます。

この星座と、本文で描かれている【場面Ⅰ】で作り出されている物語の関係の説明として最も適切なものを選びなさい。

ア　星座がきれいな十字の形をしているので、物語に登場する「十字架」も美しいものとして描かれ、その姿に人物たちが「ハルレヤ」と喜びの声を上げるという物語を作り出している。

イ　実際の夜空の中でこの星座がとても目立つことから想像をふくらませ、どのような人々もいつかは星となって、かがやける天上に導かれていくことを示す物語を作り出している。

ウ　星が十字の形に見えるのは見る人の想像にすぎないように、どんなにつながりあったように思える人と人との関係も途切(とぎ)れてしまうかもしれないという物語を作り出している。

エ　星が十字の形を成していることから想像をふくらませ、光かがやく「十字架」というものを描き出し、人物たちが「神さま」のもとへ向かって行くという物語を作り出している。

問5　――――3について、ここでのカムパネルラの心情の説明として最も適切なものを選びなさい。

ア　「ほんとうのさいわい」を願うジョバンニの考え方に感動しているが、自分はその答えがわからないので、うれしい気持ちと悲しくわびしい気持ちが混ざり合っている。

イ　「どこまでも一緒に行こう」と、ジョバンニが自分を選んでくれたことに感動しているが、実際は一緒には行けないことが分かっていて、さびしい気持ちになっている。

ウ　「ほんとうのさいわい」を願うジョバンニの姿に強く共感しながら、「どこまでも一緒に行こう」と呼びかけてくれる言葉にも心を打たれ、清らかな気持ちになっている。

エ　「ほんとうのさいわい」を願うジョバンニの姿に共感し、「どこまでも一緒に行こう」という言葉にはげまされ、ずっと一緒にいられることを確信する気持ちになっている。

問6　――4とその前後の場面について、次の各問いに答えなさい。

①　――4の直前からここまでの説明として最も適切なものを選びなさい。

ア　ジョバンニとカムパネルラは言葉の上では一致（いっち）しているが、それぞれの見えるものは異なり、二人の思いはかなわずに、違う方向へ向かっていくことを示している。

イ　ジョバンニとカムパネルラは言葉の上では一致しているが、それぞれの見えるものは異なり、カムパネルラが本当はジョバンニに同意していないことを示している。

ウ　「どこまでも一緒に行こう」と呼びかけるジョバンニに対し、カムパネルラはあえてそれには答えず景色について話すことで、一緒には行けないことを示している。

エ　「どこまでも一緒に行こう」と提案するジョバンニに対し、カムパネルラは窓から見える景色について無邪気（むじゃき）に話すだけであり、二人の心のすれ違（ちが）いを示している。

②　――4の直後の場面についての説明として最も適切なものを選びなさい。

ア　さびしい気持ちになったジョバンニがぼんやりとしているうちにカムパネルラは去ってしまい、ジョバンニは空席に向かい呼びかけるしかなかった。

イ　さびしい気持ちになったジョバンニの呼びかけにカムパネルラは答えようとしたが、ジョバンニにカムパネルラの言葉が届くことはなかった。

ウ　さびしい気持ちになったジョバンニは、もう一度「一緒に行こう」と呼びかけるが、その言葉がカムパネルラとの別れの言葉になってしまった。

エ　さびしい気持ちになったジョバンニは、もう一度「一緒に行こう」と呼びかけるが、カムパネルラとは心がすれちがったままで別れてしまった。

問7　――5で、銀河鉄道の旅から戻(もど)ったジョバンニは、どのような心情になっていると考えられますか。本文の展開と、――5のなかの言葉に注目して、あなたの考えを書きなさい。

第三問　次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。

必要と不必要

突然（とつぜん）だが、日常的にはよく使うけれど立ち止まって考えられることのほとんどない、とある言葉を取り上げるところから始めたいと思う。

その言葉とは「贅沢（ぜいたく）」である。

贅沢とはいったいなんだろうか？

まずはこのように言えるのではないだろうか？　贅沢は不必要なものと関わっている、と。必要の限界を超えて支出が行われるとき、人は贅沢であると感じる。たとえば豪華（ごうか）な食事がなくても生命は維持（いじ）できる。その意味で、豪華な食事は贅沢と言われる。装飾（そうしょく）をふんだんに用いた衣類がなくても生命は維持できる。だから、これも贅沢である。

贅沢はしばしば非難される。人が「贅沢な暮らし」と言うとき、ほとんどの場合、そこには、過度の支出を非難する意味が込（こ）められている。必要の限界を超（こ）えた支出が無駄だと言われているのである。

だが、よく考えてみよう。たしかに贅沢は不必要と関わっており、だからこそそれは非難されることもある。ならば、人は必要なものを必要な分だけもって生きていけばよいのだろうか？　必要の限界を超えることは非難されるべきことなのだろうか？

おそらくそうではないだろう。

必要なものが十分にあれば、人はたしかに生きてはいける。しかし、必要なものが十分あるとは、必要なものが必要な分し

かないということでもある。十分とは十二分ではないからだ。

必要なものが必要な分しかない状態は、リスクが極めて大きい状態である。何かのアクシデントで必要な物が損壊(そんかい)してしまえば、すぐに必要のラインを下回ってしまう。だから必要なものが必要な分しかない状態では、あらゆるアクシデントを排(はい)して、必死で現状を維持(いじ)しなければならない。

これは豊かさからはほど遠い状態である。つまり、必要なものが必要な分しかない状態では、人は豊かさを感じることができない。必要を超えた支出があってはじめて人は豊かさを感じられるのだ。

したがってこうなる。必要の限界を超えて支出が行われるときに、人は贅沢を感じる。ならば、[1]人が豊かに生きるためには、贅沢がなければならない。

浪費(ろうひ)と消費

とはいえ、これだけでは何かしっくりこないと思う。

お金を使いまくったり、ものを捨てまくったりするのはとてもいいことだとは思えない。必要を超えた余分が生活に必要ということは分かるし、それが豊かさの条件だということも分かる。だが、だからといって贅沢を肯定(こうてい)するのはどうなのか？

このような疑問は当然だ。

この疑問に答えるために、ボードリヤールという社会学者・哲学(てつがく)者が述べている、[2]浪費と消費の区別に注目したいと思う。

[3]贅沢が非難されるときには、どうもこの二つがきちんと区別されていないのだ。

浪費とは何か？　浪費とは、必要を超えて物を受け取ること、吸収することである。必要のないもの、使い切れないものが

浪費の前提である。

浪費は必要を超えた支出であるから、贅沢の条件である。そして贅沢は豊かな生活に欠かせない。

浪費は満足をもたらす。理由は簡単だ。物を受け取ること、吸収することには限界があるからである。身体的な限界を超えて食物を食べることはできないし、一度にたくさんの服を着ることもできない。つまり、浪費はどこかで限界に達する。そしてストップする。

人類はこれまで絶えず浪費してきた。どんな社会も豊かさをもとめたし、贅沢が許されたときにはそれを享受（きょうじゅ）した。あらゆる時代において、人は買い、所有し、楽しみ、使った。「未開人」の祭り、封建（ほうけん）領主の浪費、一九世紀ブルジョワの贅沢……他にもさまざまな例があげられるだろう。

しかし、人類はつい最近になって、まったく新しいことを始めた。

それが消費である。

浪費はどこかでストップするのだった。物の受け取りには限界があるから。しかし消費はそうではない。消費は止まらない。消費には限界がない。消費はけっして満足をもたらさない。

なぜか？

消費の対象が物ではないからである。

人は消費するとき、物を受け取ったり、物を吸収したりするのではない。人は物に付与（ふよ）された（注1）観念や意味を消費するのである。ボードリヤールは、消費とは「観念論的な行為（こうい）」であると言っている。消費されるためには、物は（注2）記号にならなければならない。記号にならなければ、物は消費されることができない。

人は何を消費するのか？

記号や観念の受け取りには限界がない。だから、記号や観念を対象とした消費という行動は、けっして終わらない。

たとえばどんなにおいしい食事でも食べられる量は限られている。腹八分目という昔からの戒めを破って食べまくったとしても、食事はどこかで終わる。いつもいつも腹八分目で質素な食事というのはさびしい。やはりたまには豪勢な食事を腹一杯、十二分に食べたいものだ。これが浪費である。浪費は生活に豊かさをもたらす。そして、浪費はどこかでストップする。

それに対し消費はストップしない。たとえばグルメブームなるものがあった。雑誌やテレビで、この店がおいしい、有名人が利用しているなどと宣伝される。人々はその店に殺到する。なぜ殺到するのかというと、だれかに「あの店に行ったよ」と言うためである。

当然、宣伝はそれでは終わらない。次はまた別の店が紹介される。またその店にも行かなければならない。「あの店に行ったよ」と口にしてしまった者は、「ええ？　この店行ったことないの？　知らないの？」と言われるのを嫌がるだろう。だから、紹介される店を延々と追い続けなければならない。

これが消費である。消費者が受け取っているのは、食事という物ではない。その店に付与された観念や意味である。この消費行動において、店は完全に記号になっている。だから消費は終わらない。

浪費と消費の違いは明確である。消費するとき、人は実際に目の前に出てきた物を受け取っているのではない。これは前章で指摘したモデルチェンジの場合と同じである。なぜモデルチェンジすれば物が売れて、モデルチェンジしないと物が売れないのかと言えば、人がモデルそのものを見ていないからである。「チェンジした」という観念だけを消費しているからである。

ボードリヤール自身は消費される観念の例として、「個性」に注目している。今日、広告は消費者の「個性」を煽り、消費者が消費によって「個性的」になることをもとめる。消費者は「個性的」でなければならないという強迫観念を抱く（いまの言葉ではむしろ「オンリーワン」といったところか）。

問題はそこで追求される「個性」がいったい何なのかがだれにも分からないということである。したがって、「個性」はけっして完成しない。つまり、[4]消費によって「個性」を追いもとめるとき、人が満足に到達することはない。その意味で消費は常に「失敗」するように仕向けられている。失敗するというより、成功しない。あるいは、到達点がないにもかかわらず、どこかに到達することがもとめられる。こうして選択の自由が消費者に強制される。

（國分功一郎『暇と退屈の倫理学』より）

（注）　1　観念：人間がものごとに対して持つ考えやイメージ。

2　記号：本文では、あるモノの実体ではなく「それを表すしるしやイメージ」という意味で用いている。

問1　――――1について、なぜ「人が豊かに生きるためには、贅沢がなければならない」といえるのですか。本文を踏まえた説明として最も適切なものを選びなさい。

ア　必要なものが十分にあれば、たしかに生きていくことはできるが、それでは満足できなくなってしまうから。

イ　必要なものが十分にあることは、十分ではあるが十二分ではないため、贅沢とはいえなくなってしまうから。

ウ　必要なものが必要なだけしかない状態では、予期しないアクシデントに対応できなくなってしまうから。

エ　必要なものが必要なだけしかない状態では、必死で現状を維持しなければならなくなってしまうから。

問２　――――２「浪費と消費の区別」について、次の各問に答えなさい。

Ⅰ　浪費と消費について、本文中の説明を次のようにまとめました。表の空欄に入る言葉をカッコ内の文字数に従って本文から抜き出しなさい。

	浪費	消費
対象	（①　1字）	(①) ではない（②　2字）や（③　2字）
（④　2字）	ある	ない
効果	（⑤　2字）をもたらす	(⑤) をもたらさない
結果	「（⑥　2字）」し （⑦　3字）をもたらす	「(⑥)」しない ＝常に「（⑧　2字）」するように仕向けられる

Ⅱ　本文およびⅠの表をふまえて、文中で説明されている「浪費」と「消費」の違いについて簡潔に説明しなさい。

Ⅲ　次の例は「浪費」と「消費」のどちらかに分類されます。「浪費」にあてはまるものを二つ選びなさい。

ア　誕生日のお祝いに家族で高級すしを食べに行く。

イ　ＳＮＳ上で話題になっているパンケーキの店に行く。

ウ　スマートフォンの新機種発売を知り、受付開始時刻に予約する。

エ　子どものころからあこがれていた車種のバイクを購入（こうにゅう）する。

オ　ソーシャルゲームの期間限定ガチャの広告を見て課金する。

問3　――――3で筆者は、贅沢が非難されるときに「浪費」と「消費」が「きちんと区別されていないこと」を批判しています。筆者の考えによれば、本来はどのように考えるべきだということになりますか。考えうる最も適切なものを選びなさい。

ア　浪費と消費を区別しつつ、浪費については、生活に豊かさをもたらすが、度を越してしまわないようつねに警戒し、消費についてはストップすることがないという危険性に警戒すべきだということ。

イ　浪費と消費を区別したうえで、あるところで限界が来て「完成」にいたる浪費つまり贅沢ではなく、終わることがないのに「完成」をめざすことを求められる消費のほうを警戒すべきだということ。

ウ　浪費と消費の区別がしっかりとできていれば、消費にとらわれた自分に気づき、永遠に終わらない消費の悪循環におちいるリスクは少なくなるので、贅沢を非難する必要はまったくないということ。

エ　浪費と消費の区別がしっかりとできていても、自分は浪費つまり贅沢をしていると思い込みながら、実際には消費にとらわれてしまう危険性があるため、やはり贅沢は非難されるべきだということ。

問４　――――４に関連して、「消費によって『個性』を追いもとめる」行為（こうい）**とはいえないもの**を次の中から選びなさい。

ア　まわりの友だちから「いっしょにいると楽しい人」と思われるため、話題のネットゲームをプレイする。

イ　自分らしくありたいと思い、「自分らしさ」というキーワードが入った本をたくさん図書館で借りて読む。

ウ　「私らしい人生を」と題したある塾の合格体験記にひかれて入会し、面談で提案された有名進学校をめざす。

エ　「自分は何者なのか？」という疑問を持ち、自身を表すキーワードや友人との関係性を書き出してみる。

問5　第二問の「ほんとうのさいわい」も、本文における「オンリーワン」も、明確な「答え」がなく、決して「完成」にたどりつくことがない問題のひとつです。次の対話は、「答え」のない問いを考えることについて、生徒たちが話している場面です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

Aさん「〈答え〉がないことを考える意味なんてある？　僕たちが教わってきたのは、正解のある問題の解き方ばかりだ」

Bさん「たぶん、考えることが大事なんだよ。その結果が〈わからない〉であったとしても、はじめから投げ出してしまわなければ、それは何かが変わったといえると思う」

Cさん「でも〈答え〉がないものに向き合い続けるのは、苦しいよ。苦しんだのに、成果が得られないかもしれないなんて…」

Dさん「そうだよ。偶然出会うものごとに身を任せるのもいいじゃないか」

Eさん「たしかに、苦しい。けれども僕は〈苦しさ〉のなかに居つづけてみようと試みるのも、必要なのかもしれないと思う」

Fさん「〈答え〉が意味をなさなくなる場合もあるし、原因が存在しないことだってある」

Gさん「ある場所やある時、ある人にとっての〈答え〉が、必ずしも他にとっても〈答え〉になるとはいえないよね」

Hさん「そう、ぼくらは本当に思っていることを言わずに、その場しのぎの〈正解らしい〉答えを出すこともある」

Iさん「大切なのは、〈答え〉を急ぐことではなく、問い続けることなのかもしれない。」

問　あなたは、これらの意見のどれに共感しますか。共感する理由や具体例を含め、あなたの意見を書きなさい。もしも共感する意見がない場合は、そのことを理由や具体例を含めて書きなさい。解答は、枠におさまるように書きなさい。

２０２４年度

第一回　アドバンスト入試問題

国語・解答用紙

聖学院中学校

受験番号	座席番号	名前

一		二							三							
問1	問2	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問1	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	問2	問3	問4	問5
1	①	Ⅰ	①				①			①						
2		Ⅱ	②				②			②						
3	②		②							③						
4	③		③							④						
										⑤						
										⑥						
										⑦						
										⑧						